



TITLE:

昭和13年度總會記

AUTHOR(S):

CITATION:

昭和13年度總會記. 天界 1939, 19(215): 152-152

ISSUE DATE:

1939-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167780>

RIGHT:

昭和13年度總會記

本會の昭和13年度總會は最初昨年12月東京に於て開催される筈であつた處、種々の都合で延期され去る1月7日大阪市立電気科學館で開かれた。

この日16時より同館7階休憩室で座談會を開く。當日は寒氣殊に厳しかつたが各地より熱心な會員が參集、眺望よき休憩室にて歡談した。

次で17時より6階天象館にて山本一清博士の「本年度中の天文現象」を題する講演があり、同講演を中心としてプラネタリウムの特別演出があつた。

今回の演出時間の關係上同博士の講演を途中で惜くも中止し18時より同館地下階食堂で總會に移る。先づ宮森大阪支部長より主催地代表として挨拶があり、西森經理部長より昭和13年度會計報告、大口事業部長より事業報告あり、次で現役員の任期満了せるため改選を行ひ、新に會長、副會長、理事の決定を見た。而して新理事會の提案により會則の一部變更(會計監督の項削除)が諮られ満場一致で承認された。以上で議事を終り一同晚餐を共にしつゝ、先に時間の關係上途中で切れた山本博士の講演を聞く。次で席席順に一同自己紹介をなす。食後懇談にうつり遠く滿洲より歸省された河合孝一氏が滿洲の近況を語られ滿洲國歌及滿鐵行進曲等を唱はれ、次で五藤齋三氏より「日本に於ける光學工業の發達」を題する講演があり豊富な體驗にもさづいて面白く語られた。中でも日露海戰に於て我海軍の首腦者が逸早く新銳光學兵器を採用したため之がごんなに戰局を有利に導いたか、又歐洲大戰當時の我光學工業界の狀況やその後の發達振り、殊に最近事變を契期として我國の光學工業の非常な躍進振り等を述べられ、又我國反射望遠鏡界の開拓者中村要氏の思出や研究初期の同氏の逸話を興味深く語られた。次いで佐部進氏が美聲でテナリ獨唱され一同思はず聞きされる。かくて同氏の獨吟を最後に和氣霽々たる内に本年度の總會を終了した。出席者40名。〔津久井生〕

岡林滋樹氏は倉敷へ赴任

さきに倉敷天文臺では小山理學士の急死により觀測陣は淋しさを感じたが、今回原山本水野木邊諸氏の協議により、神戸の會員岡林滋樹氏を新しく臺員として迎えることとなり、同氏は2月末赴任する。岡林氏は1936年に射手座の新星を發見し、米國から金牌を獲た人であり、今後やはり倉敷では山本臺長監督の下に主として變星の觀測研究をする筈である。